

〈ポスター発表の要旨〉

学校教育目標の実現を図るカリキュラム・マネジメント

— 『児童支援専任教諭』と養護教諭に着目して—

教育デザインコース 国語領域

本間 隆司

はじめに

現在、神奈川県内の公立小・中学校の教員の年齢構成では、26歳～35歳は特に多い状況である。いずれ学校の中核となるこの年齢層の教員が、国語科教師としての力量を、自らの力で高め、また学校の中で高め合う手法を獲得しておく必要がある。

方法

(1) 教育インターンで確認した「つながり」

教育インターンでは国語科で獲得した知識や技能が他教科で生かされている場面を数多く見た。それは、社会科学の意見交流の機会や、美術科の作品紹介の機会においてである。

(2) 文献にみる国語科教師の力量形成

国語科の授業について、田近(2009)は「国語の授業は、授業外で行う生涯教育としてのそれを視野に入れて進めなければならない。」と述べ、塚田(2010)は「国語科の学習指導は、その対象である学習者の国語学力形成に向けて設定される。」と述べる。評価について、関田(2016)は「教育評価は、診断や看取りに励ましが加わったもの、あるいはその人に事実を示し寄り添うことと、その事実を受け止めるその人なりのやり方を認めること、と捉えてみてはどうかと考えています。」と述べる。

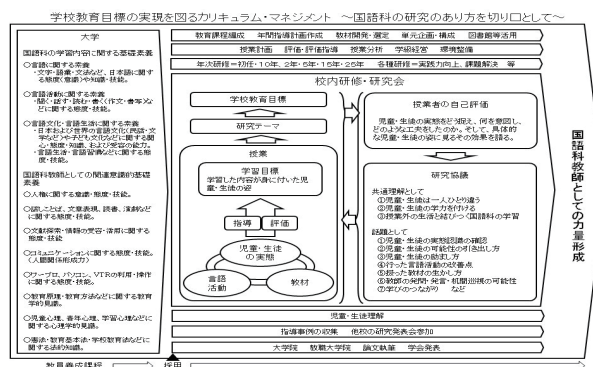
授業研究について、佐藤(2015)は「現職教育における授業研究は、専門科としての教師の学びの中核である。教師は、生涯にわたって自他の授業実践から学ぶことをとおして専門家として成長し、創造的かつ自律的に職務をまっとうすることができる。」と述べる。

(3) 校内研修会の実施状況

平成27年度の全国学力・学習状況調査の学校質問紙調査では、「授業研究を伴う校内研修を前年度に7回以上実施した学校の割合は、26年度と比べやや高くなっている。」と報告されている。

結果と考察

これらを踏まえて次の図を提案した。



中央が「授業研究を伴う校内研修」の手法について示したものである。

ここでは、学校教育目標を実現するために、日々行う授業を構成する要素として、「児童・生徒の実態」「言語活動」「教材」があり、それらは指導と評価の連続によって授業として成立すること。そして、授業後に行う協議の冒頭には、授業者が自己評価をすることの重要性和、それを受けた協議の共通理解事項と話題例を示した。

今後このような校内研修会に、指導者・助言者・共同研究者としての指導主事の関わり方を明らかにすることが今後の課題である。

【引用文献】

- 田近洵一(2009).『小学校 国語科授業研究 [第4版]』. 教育出版
- 全国大学国語教育学会(2010).『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』. 学芸図書
- 佐藤学(2015).『専門家として教師を育てる 一教師教育改革のグランドデザイン』. 岩波書店
- 関田一彦・渡邊貴裕・仲道雅輝(2016).『教育評価との付き合い方 これからの教師のために』. さくら社